

婚約破棄をされたので、

次の婚約をせずに薬師として生きていきます！



アルギロス

リヴィアスとよりを
戻そうとする元婚約者。

ミストラル

リヴィアスの父。
身内以外には冷淡な性格。

ラディウス

竜神の加護を持つ
隣国の王太子。
リヴィアスを一目で気に入り
何かと訪ねてくる。

レイン

ラディウスの幼馴染みで
リヴィアスのいとこ。
陽気で快活な好青年。

グレイシア

リヴィアスを溺愛する兄。
アルギロスを心底嫌っている。

リヴィアス

薬神の加護を持つ令息。
薬師の実力を疑われて
婚約破棄され、
隣国へ療養をしに旅立つ。

Characters

一章 婚約破棄

それは突然の出来事だった。

「リヴィアス・シエル・レイディアンズ大公令息！ 貴様と俺、アルギロス・マッド・ウィキッドとの婚約を破棄する！」

葡萄色のベリーショートの髪、自信に満ち溢れた若草色の目をした青年——アルギロスは、腰まである銀色の長い髪を緩く結んだ少年に向かって指を差して、高らかに宣言した。アルギロスの隣には我が物顔で彼に凭^{もた}れるように腕を組み、ミモレ丈の赤いドレスを纏^{まと}う、小豆色のミディアムヘア、紫色の大きな目の少女がいる。

（ああ……やっぱり、こうなるのか……）

リヴィアスと呼ばれた少年は小さく息を吐いて、天色^{あまいろ}の目でアルギロスの足元の床を見る。

その表情は憂いに満ちていて、この事件が起こるべくして起きたのだと物語っている。

アルギロスの宣言に、会場にいる様々な貴族達がざわめく。

（今日は、先輩方の門出を祝うべき卒業パーティーなのに……）

リヴィアスはちらりと周囲を窺う。

ここはブラカーシュ王国の王立タイバス学園の式典等に使われるホールだ。ちょうど今は様々な爵位の貴族の子女とその家族が集まり、卒業パーティーを始めた瞬間だった。十八歳の生徒達の卒業を祝う場で、王族、大臣や国内の貴族達も集まっている。

パーティーには家族はもちろん、婚約者がいる場合は学生ではなくても同伴可能だ。

十六歳のリヴィアスは在学生でもあり、婚約者のアルギロスが卒業するのでパーティーに同伴する予定だった。

しかしどういう訳か、婚約者からはエスコートの話はなく、嫌な予感がしたので、四歳年上の兄のグレイシアに同伴をお願いした。

（それが、良かったのか、悪かったのか……）

隣に立つ兄へ視線をちらりと移す。

兄の周囲には怒りで発生した冷たい魔力が漂っている。

（これは、色々といけないし……もう、無理。このままだと心が死ぬ……）

会場内の学生や貴族達の視線が集中しているのもあり、リヴィアスは静かに、真っ直ぐアルギロスを見た。

「――破棄の理由を伺ってもよろしいですか？」

凜とした声音を意識して、リヴィアスは静かに問う。

リヴィアスの問いに、待つてましたと言いたげにアルギロスと少女の目が輝く。

「リヴィアス、お前は誉れ高き薬師でありながら、こちらのプサリ男爵家のモノリス嬢の功績を

奪った！ そのようなことをする人間が、我がウィキッド侯爵家に属することは認めない！ よって、婚約を破棄する！」

自信満々にアルギロスは、周囲の貴族達にも聞こえるように叫ぶ。

「プサリ男爵令嬢の功績とは、どのような功績でしょうか？」

首を少しだけ傾げ、リヴィアスは静かに問う。

「身に覚えがあるだろう！ 半年前まで国内で流行っていた病だ！ その特効薬をお前は作ったと言ったが、実際に作ったのは見習い薬師でもある彼女、モノリス嬢だ！ お前との婚約破棄後は、モノリス嬢と婚約する！」

アルギロスの宣言に、大きく会場がざわめく。

それを貴族達の賛同と受け取ったのか、アルギロスは更に声高に叫ぶ。

「お前は王弟殿下の息子で、薬師としても有名で、大公家の次男。彼女はまだ見習い薬師で男爵家の令嬢。見習いの功績を自分が持つ権力で握り潰し、自分のものにしたいに違いないっ！ 俺を流行り病から救ったモノリス嬢を貶めた、そんなお前を俺は決して認めない！」

「リヴィアス様、ヒドイです！」

アルギロスに寄り掛かるように、モノリスは目にハンカチを当てる。

「は？ お前、私の弟を盗人だと言っているのか？ それとその令嬢は弟から名を呼ぶ許可を得ているのか？」

魔力を冷気に変えて漂わせながら、グレイシアがモノリスを鋭く見る。

見られたモノリスはビクリと肩を震わす。

（……僕が作ったもので間違いないのだけど、これはどういうことになっている？）

表情を変えず、無言のまま、リヴィアスは今度は国王がいると思われる場所をちらりと見る。

こちらへ乗り込みそうな勢いの、リヴィアスにとって伯父でもある国王を、従兄でもある王太子と宰相が必死に押さえているのが見えた。

（……陛下、怒っていらっしやる……。早く終わらせた方がいいよね……。兄様も怒ってるし）

小さく息を吐き、吸い込んでリヴィアスはアルギロスをもう一度見た。

「流行り病の特効薬は、私が作ったもので間違いありません。特効薬の実物もレシピを含め、国王陛下に報告し、宮廷薬師の薬師長に提出して、承認を得ています。レイディアンス大公家の名に誓って、流行り病の特効薬は私が作ったと宣言致します」

「私も宣言しよう。大公家次期当主、グレイシア・ヘイル・レイディアンスの名に誓って、我が弟リヴィアスが流行り病の特効薬を作ったことに間違いはない。そして、流行り病に罹^{かか}った弟の婚約者のウィキッド侯爵令息を助けるため、優先的に特効薬を贈っている。その記録もある」
「なっ！」

リヴィアスとグレイシアの宣言に、アルギロスは目を大きく見開く。

家名に誓って宣言するのは、家名を背負い、偽りではないと証明する言葉だ。

偽りであった場合、罪に問われ、場合によっては貴族籍から抜け、平民にならなくてはならない。それを二人が平然と宣言したことで、嘘ではないと察した貴族達の同情のような視線がリヴィア

スに纏わりつく。

「ですが、ウィキッド侯爵令息は信じて下さらないご様子。このまま、婚約関係を続けても、私はウィキッド侯爵令息を信頼する気持ちが持てません。ですので、謹んで婚約の破棄に応じます」

少し悲しげに頷き、リヴィアスは片方の足を後ろに引きながらのお辞儀——ボウアンドスケレ——プをした。

その行動を見た貴族達に動揺が走る。

「国王陛下。今回の件、我が弟のことはもちろん、レイディアンス大公家の名を貶め、侮辱し、傷付けようとする行為です。ウィキッド侯爵家とプサリ男爵家に抗議を致します。陛下の御前での婚約破棄の宣言をウィキッド侯爵令息がしましたので、速やかな婚約破棄の許可を頂きたく存じます。そして、我が弟が特効薬を作ったことは偽りではないと証明するため王家の査問機関に捜査して頂き、もしウィキッド侯爵家とプサリ男爵家による虚偽と認められた場合、両家には謝罪と賠償を望みます」

リヴィアスの両肩をそつと支え、労るような目を向けた後、グレイシアは国王に告げる。

グレイシアの言葉に、アルギロスとモノリスはびくりと震える。

「——分かった。ウィキッド侯爵令息の婚約破棄の宣言は私も聞いた。この場で認めよう。特効薬については我が王家の査問機関で調べよう」

先程まで怒りの色を浮かべていた国王は、表情を戻し、鷹揚に頷いた。

分が悪いと感じたのか反論しようとするアルギロスを、グレイシアが遮った。

「ありがとうございます。それと、弟は突然の婚約破棄にショックを受けています。申し訳ございませんが、この場を辞させて頂きたいのですが、よろしいでしょうか？」

周囲から守るように、グレイシアはリヴィアスの肩を抱いて、国王に尋ねる。

「もちろんだ。リヴィアス、ゆっくり休みなさい」

リヴィアスを労るように国王は頷いた。

「はい、陛下。お心遣い、痛み入ります……」

国王に礼をして、リヴィアスは力なく微笑んだ。

ショックを受けたというグレイシアの言葉通り、リヴィアスのお辞儀は先程より精彩に欠けていた。

「陛下、皆様。失礼致します。先輩方、卒業おめでとうございます。お祝いの場に水を差してしまい、申し訳ございません」

力なく小さく微笑んだまま、リヴィアスはグレイシアに付き添われ、扉へ向かう。

「なっ、リヴィアス！ 待てっ！ 否定するならちゃんと説明をしろ！」

アルギロスの叫びを背中で聞きながら、リヴィアスとグレイシアは会場を後にした。



リヴィアスが婚約者に婚約破棄を宣言された卒業パーティーの翌日。

リヴィアスはグレイシアと共に、ブラカーシュ王国の王都を離れ、国境に位置するレイディアンス大公家の領地であるレイディアンズ辺境領に戻っていた。

普段であれば、二日掛けて馬車で戻るのだが、大事な弟の婚約破棄で怒り心頭のグレイシアが転移魔法を使ったのだ。共に王都に来ていた使用人達も、レイディアンズ大公家の私設魔術師達によって転移魔法で続々と戻っているところだった。

昼を過ぎた頃、レイディアンズ辺境領の領主館の執務室で政務をしていたレイディアンズ大公ミストラルは、長男グレイシアの報告を聞き、書きかけの書類を握り締めた。

「……成程。あの小僧は、リヴィの前で不貞を働き、薬師としての名誉まで傷付け、貶めようとしたという訳か」

一つに結んだ長い月白色の髪が一房、肩に流れているのを払い、唸るような低い声で吐き捨てた後、ミストラルは鋭い紺碧色の目をグレイシアに向けた。

「はい、父上。その通りです。まだ婚約者だったリヴィの前で、堂々と男爵家の令嬢の肩を抱いていたので」

父の言葉に頷き、グレイシアは昨日の出来事を思い浮かべる。

ウィキッド侯爵令息が婚約破棄を宣言した後、自分より頭一つ分低く、体格も優れず、母に似た容姿のリヴィアスを観衆の目から守るように肩に触れた時、弟は小さく震えていた。

ウィキッド侯爵令息にしなだれ掛かるブサリ男爵令嬢は、他の貴族達には見えないように、だがリヴィアスには見えるように勝ち誇ったような笑みを浮かべ、挑発していた。

リヴィアスの隣にいたグレイシアには、男爵令嬢の表情がすっかり見えていたことに気付いていたのかは知らないが。

挑発されたリヴィアスは、気丈にも退室するまで、凜とした声と態度で大公家の子息に相応しい振る舞いをした。

人のために薬を日々作り、最も効果が良い薬はないかと研究する、心優しい大事な弟を傷付けたウィキッド侯爵令息が許せず、その場で凍らせてやろうと思ったグレイシアだったが、リヴィアスにも大公家にも不利になるため、我慢した。

それが、余計に怒りを込み上げさせてくる。

レイディアンス大公家の当主は、現国王の弟——王弟だ。

その息子であるグレイシア、リヴィアス、もう一人の弟は王弟の子供、準王族にあたる。

更に、リヴィアスは薬師として幼い頃から王国に貢献しており、特効薬の開発の功績も評価され一代限りの公爵位も持っている。

ただか、侯爵家の嫡男というだけで、家としても個人としても爵位が上のリヴィアスを傷付ける態度が更にグレイシアの怒りを増大させる。

「よく、我慢した、グレイ」

グレイシアの表情で、卒業パーティーでの様子を察したミストラルは苦笑した。

「……リヴィイは、前からあの小僧の不貞に気付いていたのか？」

「どうでしょうか。まだリヴィイには聞いていませんが、聡い子です。気付いていたかもしれません。

あの不貞野郎のタイバス学園での動向は、我が家の影達に調べさせています。本日中には全容が分かるのではないのでしょうか。王家の査問機関もすぐ動いて下さったようです」

「あの小僧の父親は学園時代の学友で、気心の知れた間柄だ。その息子で、歳も近いリヴィイを守ってくれるだろうと考え、六年前に婚約をさせたのだが、こうも愚かだったとは……。リヴィイには悪いことをしてしまった」

溜め息を吐き、ミストラルは額に手を当て項垂れる。

「逆に良かったのではないのですか？ 不貞をしていたことも知らず、あのまま不貞野郎と結婚していれば、リヴィイの心は更に傷付き、もしかしたら命を落としていたかもしれません。それが結婚前の婚約中に知れたのです。リヴィイはもちろん、我が家としても良かったかと思えます。まあ、それでも許しはしませんが」

こめかみに青筋を立てて、グレイシアはにっこりと笑みを浮かべる。

「そうだな。しつかり、大公家としても抗議しておこう。兄上が捜査をして下さるようだし、真実……と言ってもこちらは嘘偽りでもないのだが、ちゃんと判明すれば更に報復という」

グレイシアと同じ笑みを浮かべ、ミストラルは頷いた。

その時、ミストラルの執務室の扉が大きく開け放たれた。

「父上！ グレイ兄上！ リヴィイ兄上が婚約破棄されたってどういうことですか!？」

「アイシクル。どうもこうもない。あちらが不貞を働いていたのにもかわらず、堂々と卒業パーティーでリヴィイに婚約破棄を宣言してきた。詳しく説明すると……」

レイディアンス大公家の三男、アイシクルに向かってグレイシアが更に詳しく説明する。

「は？ あいつは馬鹿ですか？ リヴィ兄上はまず人に対してそんな馬鹿なことをしませんし、自分の不貞は棚上げですか？」

詳しく聞いた父と長兄と同じ月白色の短い髪、母と同じ蜜柑色の目を大きく見開いて、アイシクルは父と長兄を見た。

「だから馬鹿な不貞野郎なんだよ。あのまま、リヴィと婚約していたら、アレを義弟と呼ばないといけなかった。そういう意味でも、破棄して良かった」

「リヴィ兄上は大丈夫なのですか？ 俺、まだ会えていないんですけど……」

アイシクルが不安げに父と長兄を見つめる。

「私とステラのところに挨拶し、婚約を破棄したと報告してくれ、少し休むと言っていたが……」

ミストラルが呟くように言うと、アイシクルは何かに気付いたのか、少し顔色を青くした。

「ちよつと、リヴィ兄上のところに行つてきます！」

アイシクルは慌ただしくミストラルの執務室を出た。

「父上、私も様子を見に行つてきます」

そのアイシクルの様子に不穏を感じ、グレイシアも後を追った。

レイディアンス大公家には、子供が三人いる。

長男グレイシアは二十歳、次男リヴィアスは十六歳、三男アイシクルは十五歳。

長男と三男は父のミストラルに顔立ちが似ており、精悍な顔立ちで、騎士のような身体付きの美

丈夫だ。

長男グレイシアは次期当主として育てられたこともあり、大公家の敵と判断した者には氷のように冷たく鋭い目で見ると、その美貌も相まって『氷華の貴公子』と呼ばれている。

三男アイシクルも長兄の補佐として育てられ、長兄と似た顔立ち、同じく大公家の敵と判断した者には捉えどころのない風のような飄々とした態度で攻撃し、その美貌も相まって『風華の貴公子』と呼ばれている。

対する次男のリヴィアスは、長男と三男の顔立ちとは違い、社交界で『夕月の姫君』と呼ばれた母ステラに似た美しい顔立ち、攻撃的な長男と三男と比べて、心優しく穏やかな性格、光で輝く銀色の長い髪が月のようだと評され、『月華の君』と呼ばれている。

この世界では、神の加護が生きる全ての者達に与えられるが、中でも強い加護を与えられた者がいる。ブラカーシュ王国にも、王家に連なる者や貴族の一部の者で様々な神の加護を与えられた者がいる。

リヴィアスは薬神の加護を与えられて生まれてきた。

長男グレイシアも水神の加護、アイシクルは風神の加護を持っている。

その薬神の加護で、人々の役に立ちたいと思ったリヴィアスは、五歳で薬師の勉強を始めた。

リヴィアスは、十歳の頃から様々な薬を作り、薬師ギルドに加入し、領民はもちろん、王国国民にも薬が行き渡るようにと王国に貢献していた。

領主館の自分の周囲の雰囲気を感じつつ、リヴィアスは自室のベッドの横すがに縋るように座って、

窓から見える空をぼんやりと眺めていた。

「傷付いてはいるけれど、恋愛感情というより、家族に裏切られたような気分なんだよね……」
手で触れると床がひんやりと気持ちが良い、リヴィアスは小さく息を吐く。

家同士の政略結婚として、ウィキッド侯爵家の令息アルギロスと婚約していた期間は六年間。
十歳の時に初めて顔を合わせたのが、特にリヴィアスは恋愛感情等を何も感じず、将来的に二歳上のアルギロスが夫となり、家族になる、という感覚だった。

よく覚えていないが、当時のアルギロスの顔は赤かったような気がする。

恋愛感情はなかったが、家族として、彼を支えるという意識はあった。

王弟の息子なので、教育は様々なものを受けていたが、将来は侯爵夫人としてアルギロス、ウィキッド侯爵家を盛り立てるため、薬師としての仕事の傍ら侯爵夫人としての教育も受けた。

リヴィアスが忙しくしている間に、アルギロスはタイバス学園で教師に見つからないように、こっそりと様々な女子生徒を口説いていたのを何度も見掛けた。

アルギロスの浮気遍歴を見ていると、どうやら、美人に弱いらしい。

ただ、婚約者のいない美しい女子生徒には声を掛けて、遊んだりしていたようだが、美しい男子生徒にはアルギロスは何故か声を掛けたりしていなかった。

理由はリヴィアスには分からない。

浮気も本当に火遊びのような形で、リヴィアスが注意すると、アルギロスは短くて一週間、長くて一ヶ月くらいでやめてくれた。

それでも浮気をする時点でどうなんだとリヴィアスと思う。

だが、プサリ男爵令嬢との浮気の期間は長かった。

期間は一年半前に原因不明の病が流行し、リヴィアスが作った特効薬で終息した半年前から今までの約六ヶ月。

流行り病に罹患したアルギロスを助けるために、リヴィアスは寝る間も惜しんで必死に何度も特効薬を作った。

出来上がった特効薬をすぐに王家に献上した後、ウィキッド侯爵家に贈った。

その薬でアルギロスが快復したとウィキッド侯爵家から報告と感謝の手紙を受け取り、リヴィアスはホッとしていたが、婚約者からのお礼の手紙等はなかった。

快復後、アルギロスはタイバス学園でリヴィアスと会う度に余所余所しい態度を見せるようになった。

不思議に思いつつも、静かに様子を見てみると、アルギロスはプサリ男爵令嬢と浮気をしていた。日を追う毎に、アルギロスはリヴィアスの前で堂々とプサリ男爵令嬢と仲睦まじい態度を見せるようになった。

リヴィアスも流石に度を越していると感じ、何度か静かに注意を試みたが、アルギロスもプサリ男爵令嬢も聞くことはなかった。

何度も見せつけられ、婚約者なのに冷たくあしらわれ、リヴィアスの精神は少しずつ疲れてしまった。

この時に、父であるミストラルや兄のグレイシアに報告すれば良かったかもしれないが、父同士が友人でもあり、アルギロスの父であるウィキッド侯爵や夫人、弟はリヴィアスにも優しく、自分達の息子のように、兄のように扱ってくれていることで、その関係を壊したくなくて言えなかった。「……結局、父様とウィキッドのおじ様の関係を壊してしまった……。僕が我慢すれば良かったのかなあ……」

ひんやりと冷たい床に蹲り、リヴィアスは小さく息を吐く。

「でも、もう、無理だった……。恋愛感情はなくても、裏切られ続けて、正直なところ、疲れた……」膝を抱えて床に座ったまま大きな溜め息を吐いて、リヴィアスはぼんやりと窓の外の青空を眺めていると、扉を叩く音がした。

返事をする前に扉は勢い良く開け放たれ、リヴィアスは膝を抱えたまま固まる。

扉を勢い良く開けた人物をリヴィアスは呆然と見つめる。

「リヴィ兄上！ 倒れてない!？」

「アイス……？ どうしたの?」

肩を上下させ、息を切らした状態のアイシクルを呆然とリヴィアスは尚も見つめる。

「どうしたじゃない！ リヴィ兄上、ちゃんと昼食摂った!? 朝食も食べた!？」

慌てた様子で部屋の中に入り、アイシクルはリヴィアスに近付く。

「……あ。食べてない気がする……」

呆然とした表情でリヴィアスは小さく頷く。

「やっぱり。食べないと倒れるよ。あんなヤツから婚約破棄されて、腹立つかもしれないけど、それで倒れたら仕返しも出来ないよ！ リヴィ兄上、ちゃんと食べないと……。グレイ兄上も一緒にいたのなら、ちゃんとリヴィ兄上の様子を見て下さい!」

ぎゅっと自分より少し背が低く、身体も細い次兄を抱き締め、アイシクルは追い掛けて来たグレイシアを半眼で見つめる。

「すまない……。帰ったら朝昼兼用で食べると言ってたから……」

末弟の言葉にハツとした表情で、グレイシアは思い出した。

「食べるまで側にいないとリヴィ兄上は絶対に食べませんよ。いつも薬作りの時がそうでしょう!？ だから、リヴィ兄上は俺より細いし、背も少し低いんですよ!」

アイシクルがグレイシアに説教をするように怒る。

リヴィアスからしたら、酷い言われようだ。

「……背は関係ないもん……」

気にしていることを言われたリヴィアスは、弟に抱き締められながら少し口を尖らす。

母に似たリヴィアスはたくさん食べた、運動をしてもなかなか筋肉もつかず、身体の線も細い。薬に使う薬草を育てているが、日に焼けず白い肌のままで、焼けてもしばらくの間、赤くなつて腫れるだけで白色に戻る。

成長期の年頃なのに、一歳年下の弟に背も筋肉も先を越されてしまった。

「リヴィはまだ十六歳で、成長期だ。しっかり食事をして、運動すれば背も伸びるよ。今から食べ

に行こう」

リヴィアスの頭を撫で、グレイシアは苦笑する。撫でると、さらさらの銀色の髪が窓から射し込む太陽の光で柔らかく輝く。

天色あまいろの目も太陽の光で、グレイシアと同じ紺碧色に変わる。

リヴィアスの天色の目は、光の角度で紺碧色や空色等に見え、きらきらと輝くように光る。

まるで祝福のような輝きだ。

それを見たいがために、家族はもちろん、リヴィアスの周囲の者達は目を覗き込む。

パーティーで顔見知り程度の貴族達もやって来ることがあるので、リヴィアスは気持ち俯き加減で目線を下げて接している。

家族や気心の知れた者達には、リヴィアスも上目遣いで見てしまうため、強面の私設騎士団長や無愛想な庭師も相好を崩すのをグレイシアとアイシクルは見たことがあった。

「リヴィ兄上、食事の後に思いつくのが嫌だとは思いますが、話をしてくれる？ 俺もタイバス学園で見たたり、聞いたりしていたけど、リヴィ兄上の状況とかも聞きたい。あの馬鹿からリヴィ兄上を守りたい」

「そうだな、私も聞きたい。父上も母上もだと思うから、リヴィが辛くなければどうだろうか？」

「兄様、アイス。大丈夫です。とても楽しい話ではないと思いますが、それでも宜しければ……」
小さく頷き、リヴィアスは苦笑した。

領主館の食堂で、朝昼兼用の食事を摂ったリヴィアスは、胃の辺りをゆっくり撫でた。

食堂にレイディアンス大公家の当主ミストラルと大公夫人のステラ、長男グレイシア、三男アイシクル、ミストラルの側近フューズ、執事長のゲイル、ステラの侍女イーリス、グレイシアの側近ガン、アイシクルの側近テラ、リヴィアスの側近アンブラが集まった。

全員が座るリヴィアスを案じる目でそっと見つめていた。

そんな状態の中、リヴィアスはアルギロスとの六年間の婚約で起きた出来事をぼつりぼつりと説明した。

聞いていく内に、事情を知るリヴィアスの側近アンブラ以外の顔が不快に歪んだ。

「……まさか、婚約当初から不貞を働いていたとは……」

額に手を当て、ミストラルは溜め息を吐く。

「父様、ごめんなさい。僕が黙っていたからこんなことに……」

「いや。リヴィはちゃんと何度もやめるように注意をしている。それでもやめなかった小僧が悪い」
謝るリヴィアスの頭を撫でてミストラルは告げると、この場にいる全員が同意するように大きく頷いた。

「それでも、父様とウィキッドのおじ様の仲を僕が壊してしまいました。僕がもっと我慢していれば……」

「リヴィアス。それは違う。ウィキッド侯爵と私の仲は壊れていない。ウィキッド侯爵と小僧の仲は後々壊れるかもしれないが……。何も悪くない、むしろ、浮気をやめるように何度も注意をして

いたリヴィアスが我慢することではない。それでもし、我慢したことでお前に何かあれば私とステラ、グレイシア、アイシクル、領主館で働く者達が立ち直れない」

俯くリヴィアスの頭を更に撫で、ミストラルは諭すように告げる。

ミストラル以外の全員が、リヴィアスに向かって大きく頷いた。

「そうよ、リヴィイ。貴方に何かあったら、我が家はもちろん、私の実家が隣国から騎竜で乗り込んでくるわよ」

銀色の長い髪を後ろに流し、息子を労るように慈愛に満ちた蜜柑色の目で見つめ、母ステラは膝の上で握り締めるリヴィアスの両手を解くように触れる。

ステラはブラカーシュ王国の隣に位置するエリスロス竜王国の公爵家、プロミネンス公爵家の次女だ。ブラカーシュ王国が他国を招いたパーティーで、当時の第二王子だったミストラルと出会い、恋に落ちて、恋愛結婚をした。

三人の息子を授かり、結婚して二十二年経つ今でも両親は仲睦まじい。

エリスロス竜王国のプロミネンス公爵家はステラの姉が継ぎ、別の公爵家の次男と結婚し、息子と娘がいる。

プロミネンス公爵家の息子と娘は、従兄弟同士でもあるリヴィアスとは六歳と四歳年上で、騎竜に乗る竜騎士と魔法騎士をしている。

子供の頃からリヴィアスを可愛がってくれて、一度、元婚約者のウィキッド侯爵令息にも会ったことがある。

その時点で、二人は「あいつはやめた方がいい」と言っていたのをリヴィアスはふと思い出す。虫の知らせだったのかもしれない。

「流石に忙しいでしょうから、隣国から来るのは無理だと思いますよ」

母に苦笑して、リヴィアスは小さく息を吐く。

「……リヴィイ。辛い……？」

俯くリヴィアスの顔を覗き込むように見つめ、ステラは優しく手を握る。

「……辛いといいますか、その、ウィキッド侯爵令息に対して恋愛感情は元々なかったのですが、家族にならないといけない、と思っていたので、何度も裏切られると、流石に疲れてしまつて……」

小さく呟くリヴィアスを見て、グレイシアとアイシクルは目を瞬かせる。

「ん？ リヴィイ、アレに恋愛感情を持つてなかったのか？」

「はい。全く……。政略結婚としての婚約だと思っていたので、将来的には家族になるから支えないと、とは思っていましたけど……」

「うわぁー。あの馬鹿、報われないねえー」

アイシクルの言葉に、きよんとするリヴィアスの側近のアンブラが小さく咳払いをした。

「……あの小僧の自業自得というのがよく分かった。リヴィイはあの小僧に今、何か感じるか？」

そう問い掛け、ミストラルがリヴィアスを静かに見つめる。

「傷心、といいますか。侯爵令息のことを考えるのは、少しだけ、疲れます」

「もし、破棄を撤回したいと侯爵家から連絡があった場合、受け入れるか？」

「いいえ。陛下の面前で、ウィキッド侯爵令息は婚約破棄を宣言し、僕もそれに応じました。もし、そのような連絡があっても、僕自身がウィキッド侯爵令息に対して不信感しかありませんし、今更、信頼関係の再構築をすることは難しいです。僕はもう嫌です」

小さくふるふると首を左右に振り、リヴィアスは父を見上げた。

「——分かった。もし、連絡があった場合は即拒否しよう。フューズ、ゲイルもそのように」

「はい、ミストラル様」

ミストラルの側近フューズと執事長のゲイルが応じた。

「リヴィ。何か望むことはあるか？」

「あ、でしたら、父様。今後、僕に婚約の打診がもしあれば、全て拒否して頂けますか？」

じっと父を見上げ、リヴィアスは尋ねた。

「全て？　しばらくではなくか？」

「はい。政略として婚約し、結婚することは貴族として重要なのは分かっています。でも、僕は既に陛下から一代限りの公爵位も頂きました。次男ですし、大公家を継ぐ必要ありませんし、一代限りなら子供が継ぐ必要ありません。それなら、僕は結婚せず、薬師として辺境領で国民が健康で安心して、生活出来るように薬を作っていきたいです。それに結婚しなければ、他領に嫁ぐ必要もないでしょう？」

天色の目を輝かせて、リヴィアスは父を尚も見上げる。

その目の輝きは、期待と希望に満ち溢れていて、照明の光が反射して澄んだ空色のように見えた。

「……成程。それなら、タイバス学園卒業後もリヴィと共に家に住めますね、父上。良い考えだ」

ぼそりとグレイシアが呟く。

リヴィアスはタイバス学園卒業後に、ウィキッド侯爵令息と結婚予定だった。

それがまっさらに消滅し、婚約者がいないリヴィアスはそのまま自領にすることになった。

弟を可愛がっているグレイシアの口元が笑みの形になる。

「……いや、グレイシア。それはどうなんだ？　リヴィアスが生涯独り身になるんだぞ」

「父上、大丈夫です。その時は俺がリヴィ兄上を養います！」

ぐいっとリヴィアスの腕を引っ張り、アイシクルは父に宣言する。

「アイシクル。お前の婚約者のマリン嬢が困るだろう……」

「大丈夫です！　マリンもリヴィ兄上に懐いているので！　むしろ、やった！　と思ってます」

「アイス、蓄えもあるから、流石に自分で生活出来るよ……？」

「いいえ！　リヴィ兄上の場合、薬作りに集中し過ぎて、寝食を忘れてしまうので駄目です！　しっかりと見張れる誰かがいないと駄目です」

アイシクルがそう返すと、リヴィアスは事実なので、ぐうの音も出なくなった。

「決まりね。リヴィは今後我が家に住んで、家族仲良く暮らしましょう」

良い落とし所を見つけたと、ステラはにっこりと笑った。

状況説明をしたリヴィアスは、側近のアンブラと共に自室に戻った。

「リヴィ様。お身体は大丈夫ですか？」

短い黒髪、金色の目をした長身のアンブラが心配そうにそっと主人の顔を覗き込む。

「うん、大丈夫。ありがとう、アンブラ。それとごめんね。ウィキッド侯爵令息の浮気のことを父様達に言わないでって、僕がずっとお願いしてしまってた……」

「全くですよ。六年前の婚約当初の時点で、ミストラル様に報告するべきでしたね……。こんなにもリヴィ様が我慢する必要はなかったんです。俺が無理にでも言うべきでした。そうすれば、リヴィ様が傷付くことは……」

「……しばらくすれば、僕の心も落ち着くと思うよ。だから、明日からは早速、ポーション作りをしようと思うんだ。婚約破棄したことで、ウィキッド侯爵令息がちょっかいを出すかもしれないから、しばらく学園を休んでもいいと父様が仰ってたし。でも、好きでもない僕に、わざわざウィキッド侯爵令息がちょっかいを出したりしないと思うけどね」

にこのこと目を輝かせて、上級ポーションにしようか、中級ポーションにしようか、下級ポーションにしようかと、机に置いていた在庫表をリヴィアスは確認しながら呟く。

「……アイシクル様も仰っていましたたが、自業自得ですが、あの不貞馬鹿野郎は報われませんね……」明日のポーション作りを楽しみにしているリヴィアスの後ろ姿を見つめながら、アンブラは溜め息交じりに呟いた。

貴族の中には、夫の浮気を妻は怒らず受け入れるべきといった考えを持つ者もいる。

そのような考えを持つ者は、割合としては少数派だ。

理由はブラカーシユ国王が政略結婚ではあったが、妻である王妃との関係は良好で、むしろ、国王がべた惚れしていることにある。

王弟のミストラルとその妻ステラは恋愛結婚で、仲睦まじい。

そんな王家が治めている国なので、貴族達の大半が妻との関係は良好であるように心掛けている。

一部は妻との関係が悪く、愛人を作ったり、こっそりと浮気をしたりしている。

ウィキッド侯爵は友人であるミストラルと同様、妻一筋。

まさか自分の主人の元婚約者が少数派だったとは、アンブラも思わなかった。

リヴィアスを守るため、主人の側でウィキッド侯爵令息の動向を見ていたアンブラはあることに気付いた。

ウィキッド侯爵令息の浮気は、リヴィアスの気を引くためではないかと、と。

六年前から続く、ウィキッド侯爵令息の浮気は短くて一週間、長くて一ヶ月だ。それも、リヴィアスが注意したら浮気をやめていた。

美しい女子生徒とは浮気をしていたが、美しい男子生徒とはしていなかった。

アンブラの目から見ても、主人であるリヴィアスは美しく、彼以上の美しい男子生徒を見たことがない。

美人に目がなく、浮気はするが、『月華の君』と呼ばれる美しいリヴィアスを手放す気はなかったのではないかとアンブラは考えていた。

が、国内で流行った病が終息後、突然現れたプサリ男爵令嬢と半年間も浮気をし、更に公衆の面

前で婚約破棄を宣言した。

プサリ男爵令嬢は、アンブラの目から見ると、リヴィアスには劣るが、そこそこ美人だ。浮気遍歴を思い出しても、ウィキッド侯爵令息が好きそうな美人である。

恐らく、浮気をして、ただ注意をするだけのリヴィアスに痺れを切らし、あの卒業パーティーの場で婚約破棄を宣言し、自分に縋り付かせることを狙い、最終的には男爵令嬢を愛人と認めさせ、両方を得るつもりだったのでは……とアンブラは考えてしまう。

（実際は分からないが、あちらのこれからの動向で何か見えてくるだろうし、もし、何かしようとしてもミストラル様やグレイシア様、アイシクル様がリヴィ様をお守りするだろうし、もちろん俺も護衛のルーチェもリヴィ様をお守りする。子供の俺を重い病から助けて下さったリヴィ様を）在庫表を確認し、追加をするものを用紙に記入しているリヴィアスを見つめながら、アンブラは考える。

六年前、ちょうどリヴィアスがウィキッド侯爵令息と婚約をするかしないかくらいの頃、レイディアンス辺境領の商家の次男として育った十二歳のアンブラは重い病を患った。

アンブラの実家は、たまたまレイディアンス大公家に入りにいた商家だった。

アンブラの父はアンブラが重い病になったため、良い医師を紹介してもらえないかと、ミストラルに相談していた。それを聞きつけたリヴィアスが薬神の加護を使って、その重い病を治す薬を作り、アンブラに飲ませた。

その薬でアンブラは快復し、治してくれたリヴィアスに恩を返したいと側近になった。

ルーチェも似たような理由で、リヴィアスの護衛に就いている。

心優しいリヴィアスをこれ以上、傷付けさせたくない。そうアンブラはもう一度、心に誓った。

「リヴィ様」

「ん？ アンブラ、なあに？」

用紙をにこにこ見つめていたリヴィアスは、アンブラを見て、首を傾げる。

「何があっても、絶対、俺があのだ馬鹿野郎からお守りしますから。今は別件でいませんですけど、もちろん、ルーチェも」

（別件というか、あのだ馬鹿野郎の浮気遍歴をもう一度、調べに行ってるけど……）

ルーチェの用事は、リヴィアスには伝えないようにと、ミストラルからの指示なので言えないが、恐らく今夜には帰ってくる。

「そこまでウィキッド侯爵令息は、婚約破棄した僕のことを気にしてないと思うよ？ 今までもそうだったし」

（いやいやいや、浮気の度に滅茶苦茶、あのだ馬鹿野郎はリヴィ様を意識しましたよ!? ちらちらリヴィ様を見ていて鬱陶しかったくらいに!）

のんびりと言うリヴィアスに内心、アンブラは突っ込んだ。

恋愛感情がないと言っていたから、リヴィアスの恋愛の方面に疎いのだとアンブラは感じた。恋愛以外の方面には聡いのに。

恐らく、初恋もまだだ。

（これで、もし、リヴィ様が今後、誰かと恋に落ちたらどうなるんだろう……）

出来れば、リヴィアスだけを愛し、生涯、心も身体も守ってくれる人がいい。

心優しいリヴィアスを傷付けない人がいい。

「それでも、用心するに越したことはありません。どんな小さなことでも構いません。何か違和感があれば、俺やルーチェに伝えて下さい」

「うん。いつもありがとう、アンブラ」

「よしっ！ 今日の目標達成！」

目の前のポジションを見て、少し鼻息荒くリヴィアスは両手を上に挙げた。

「いやいやいや！ リヴィ様、作り過ぎ！」

蜂蜜色の肩までの長さの髪、黒色の目をした女性のリヴィアスに突っ込んだ。

「え？ でも、ルーチェ。在庫表ではまだ足りないよ？ だから補充したんだけど……」

ルーチェという女性を見つめ、きょとんとした表情でリヴィアスは首を傾げる。

「いや、これ、薬師が数日掛けて作る量でしょ……。確かに、リヴィ様は薬神様の加護をお持ちで、比例して魔力も高いけど……」

頬を掻きながら、ルーチェはちらりと横目で机を見る。

机には所狭しとポジションが並んでいた。

数にして、百本。

上級、中級、下級ポジションがそれぞれ、綺麗に並べられている。

下級ポジションは薄い黄緑色。中級ポジションは黄緑色。上級ポジションは緑色で、窓から射し込む太陽の光できらきらとポジションの瓶と共に輝いている。

ポジションの瓶にはリヴィアスの準王族として、生まれた時から持っている個人の印であり、一代限りの公爵位の紋章でもある、三日月と月見草の花の印が刻まれている。

この瓶はリヴィアスが作った薬であると証明するものだ。

リヴィアスが薬師として国に貢献した頃、彼が作った薬を転売する者がいた。

リヴィアスの薬を購入後、薄めた状態で転売し、効果が低い薬としてレイディアンス大公家を陥れようとする何処かの貴族の悪巧みだったようで、当主のミストラルは魔導具師でもある妻ステラと共に対抗策を考えた。

リヴィアスの個人の印を瓶に刻み、その瓶の中身を別の容器に移し替えるとしたの水になる。別の物をリヴィアスの印の瓶に移すと瓶が砂になる。

薬を瓶に入れる時は、リヴィアスの魔力にしか反応しないようにした。丸薬や軟膏の入れ物も同様だ。

結果、転売はなくなり、リヴィアスの薬は効果が高いという評価が広まった。

薬神の加護を持つリヴィアスが作る薬は、他の薬師が作る薬より確かに効果が高い。

が、リヴィアスが薬神の加護を持つことは、知られてはならない。

薬神の加護については、リヴィアスの家族であるレイディアンス大公家と近い位置にいる側近

や使用人、母ステラの実家のプロミネンス公爵家、ブラカーシユ王家が知っている。

元婚約者のウィキッド侯爵家は誰も知らない。

元々は結婚後に伝える予定だった。

（今思うと、伝えなくて良かったよな、ホント。リヴィ様があの不貞最低野郎に道具として利用されて、搾取され続けるところだった）

そう思うと、ウィキッド侯爵令息はレイディアンズ大公家にとっては、とても良い形で婚約破棄をしてくれたとルーチェは思った。

「それはさておいても、作り過ぎです。魔力はもちろんですが、お身体、大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫。加護で作った訳じゃなくて、通常の薬師と同じ作り方で作ったものだから、魔力もそんなに使っていないよ」

「それでも、一般的な薬師よりも作る量が多過ぎです」

笑顔で伝えるリヴィアスを見て、ルーチェは小さく息を漏らした。

一般的な薬師が作るポーション等の薬は、頑張って作って一日に十本。

ポーション等の薬は、まず水を魔力水にするところから始まる。

飲み薬は水に魔力を加え、魔力水にしてから沸かし、薬草等の素材を入れ、しばらく煮詰めて、冷ます。冷ました後は瓶に入れて、保管または出荷が簡単な流れだ。

丸薬や軟膏の場合も、作る過程で魔力水を使う。

ここで重要なのが、魔力水だ。

水に魔力を加える過程が一番難しいと言われている。

魔力を加え過ぎると水が弾けるし、少な過ぎると水のままだ。

この過程で、薬師は魔力をたくさん使用する。

しかも、魔力水は薬等に加工せずに、放置すると一日で元の水に戻る。使用する魔力と水の量の見極めも必要になる。

リヴィアスは大量の水を満遍なく魔力水に換え、更には一日で全部使う。

お陰で、レイディアンズ辺境領はリヴィアスの薬が行き渡っている。

たくさん作っても、ステラが作った魔導具で、保管庫に置いた物は時間が止まった状態になり、劣化しない。

レイディアンズ辺境領は辺境領という名の通り、国境に接した領であり、国防の要だ。

他国や魔物の侵入を阻む要所なので、ポーション等の薬はいくらあっても問題ない。

なので、リヴィアスはせっせと作る。

傷付く騎士達や領民達を少しでも減らすために。

リヴィアスのその気持が強いのをルーチェは知っているが、別の理由もある。

この小柄な美しい少年は、とかく薬を作るのが好きなのだ。加護は二の次。

「加護は本当に使っていないんだよ……？」

女性の中では背の高い方に入るルーチェを、彼女より少し背の低いリヴィアスは上目遣いで見る。加護を使う。

この世界には、神の加護を与えられた者がいる。ブラカーシユ王国にも、王家に連なる者や貴族の一部の者で様々な神の加護を与えられた者がいる。

リヴィアスは薬神の加護を与えられて生まれてきた。

長男グレイシアも水神の加護、アイシクルは風神の加護を持っている。

リヴィアスの薬神の加護は、相手の状態を見ただけでその相手に必要な薬を精製することや、希少な薬を精製することが出来る。

例えば、欠損して年数が経っていても、四肢を瞬時に回復するという奇跡の霊薬と呼ばれるエリクサーや、あらゆる病気を治すという神の霊薬と呼ばれるソーマ。

このような希少な薬をリヴィアスは作れる。

かなり魔力を使うそうだが、リヴィアスは家族と側近分を作り、既に渡している。

ルーチェも渡された。渡された時は震えたのを覚えている。

この加護を知られば、リヴィアスはそれこそ野心や欲望溢れる貴族達や他国に狙われる上に、使い潰されるのが明らかだ。

故にこの秘密を秘匿し、知る者には制約魔法を掛けている。

リヴィアスの護衛であるルーチェも、側近であるアンブラも例外ではない。

「加護を使つてなくても、保管庫が溢れますよ」

「その時は、母様が作って下さったマジックバッグに入れておくよ」

「いや、そういう問題ではなくですね……」

「だから、明日は薬草の収穫をしようと思うんだ」

気合を入れるように両手をそれぞれぎゅつと握り、リヴィアスは笑顔で伝える。

「では、私もリヴィイ様のお手伝いをしますね」

二歳年下のリヴィアスを見て、ルーチェは姉のような気持ちで微笑んだ。

「ありがとう、ルーチェ！」



そして、次の日。

リヴィアスは宣言通り、領主館の裏手にある専用の薬草園で、薬草の収穫をしていた。

「……いや、大公家の次男で、一代限りの公爵位を持っている方に、その服装をさせる側近で、私の恋人はどうなのよ？」

手慣れた手付きでにこやかに薬草を収穫するリヴィアスを見つめ、ルーチェは呆然と突っ込む。

「日の光に当たり過ぎて、リヴィイ様のお肌が赤く腫れてはいけなからな」

満足といった表情で、ルーチェの同僚兼恋人のアンブラは何度も頷く。

『月華の君』だぞ!? それが何で、農夫の格好してるんだ……。美人だから、田舎の農夫には見えない。落差が激しい。何の罰を受けてるんだ、私は」

ルーチェは、頭を抱えるように地面に座り込み、リヴィアスを見る。

今のリヴィアスは、普段の貴族らしい服装ではなく、汚れてもよいような上衣と下衣が一体になった外衣——所謂、つなぎを着ている。色は薄い水色で、可愛らしいリヴィアスに似合っている。怪我をしないように軍手、日に焼けないように大きな麦わら帽子も被っている。可愛らしい。

だが、違う。そうじゃない。

ルーチェは思わず、叫びそうになる。

貴族ではないルーチェからすれば、表現が難しいがこれは何か違う。

「お可愛らしいではないか……！」

アンブラが血走った目で、ルーチェに力説した。

「お前、その口を今すぐ閉じる！ 大公殿下に見つかったら何と言われるか……」

人々からは敬意を込めて『水碧の大公殿下』、敵からは恐怖を込めて『水碧の鬼神』と呼ばれるミストラルは、長男グレイシアと同じ水神の加護を持つ。

水魔法が得意で、戦う時は愛用の魔法剣と水魔法で作った剣の二刀流で戦う。

美しいが苛烈な戦い方をするミストラルと、一介の護衛では力の差は歴然。

そのミストラルが可愛がっている息子達の中でも、特に愛らしいリヴィアスのつなぎ姿が見つかったら、それこそエリクサーが必要かもしれない。

首が物理で飛ぶかもしれない。または水で斬られるかもしれない。どちらもエリクサー案件だ。

「何を言ってる。ちゃんとミストラル様には報告済みだ。俺もエリクサー案件は困る」

少し青い顔のアンブラが、同じく少し青い顔のルーチェに説明する。

「……それなら良かった。いや、良かった……のか？」

思考が上手く回らない。ルーチェは何度も首を傾げることになった。

「アンブラ、ルーチェ！ そろそろ終わろうと思うんだけど、今日は他に何か予定ある？」

必要な薬草をマジックバッグに入れたリヴィアスがアンブラとルーチェのところまで駆けてくる。

「いえ。本日は特にありませんよ。何かなさりたいことはありますか？」

アンブラは先程までの表情から一変して、にこやかにリヴィアスに笑い掛ける。

同僚兼恋人のその変わり身の早さに、ルーチェは小さく溜め息を吐く。

「うーん……汗を流しに湯浴みをした後、少しお昼寝をしてもいい？」

「……何処か、具合が悪いのですか？」

「具合は悪くないと思うんだけど、何か疲れちゃって……」

困ったように笑うリヴィアスに、アンブラとルーチェは眉を下げる。

「恋愛感情はないにしても、やはり今までの精神的な疲れが出て来たのでしょうか。リヴィ様、しばらくはタイバス学園をお休みしますし、ゆっくり休みましょう」

アンブラが優しく微笑むと、リヴィアスは小さく頷いた。



リヴィアスが自室で寝ている頃、アンブラとルーチェはミストラルに呼ばれ、執務室に来ていた。

「あの、大公殿下。何故、私達は呼ばれたのでしょうか」

ルーチェは内心、ヒヤヒヤしながら、目の前の執務用の机の上でコツコツと指で音を立てながら椅子に座るミストラルを見る。

どう見ても、ご機嫌斜めだ。

その隣に立つグレイシアとアイシクルも顔をしかめている。

「つなぎか!? やっぱりつなぎを着て頂いたのが大公殿下方には駄目だったのか!? やっぱりエリクサー案件だったじゃないか!」

表情は変えず、ルーチェは心の中で嘆いた。

「……リヴィアスの様子はどうか?」

低く唸るように、ミストラルはアンブラとルーチェに問い掛ける。

「……先程まで、薬草園で薬草を収穫なさっていましたが、昼寝をしたいと仰り、お部屋で寝ていらつしやいます。何かあつても対応出来るように、侍女のアクアが近くで待機しています」

アンブラの言葉に、ミストラル、グレイシア、アイシクルの眉がピクリと同時に反応する。

「それは、収穫の疲れ?」

アイシクルが問うように尋ねる。

「いえ。収穫の疲れではなく、何故か疲れたと仰っていました」

緩く頭を振り、アンブラは否定する。

「あの不貞野郎にされた精神的な疲れか?」

「恐らくは……」

眉を寄せてアンブラは頷く。

「――父上」

「どうした、グレイ」

「ちよつと、王都へ行つてきてもいいです?」

「お前は行くな。私が引導を渡す」

ミストラルが椅子から立ち上がり、腰に提げている愛用の魔法剣の柄に手を掛ける。

「いやいや! ちよつと、父上も兄上も落ち着いて! それでうっかりあの馬鹿をやっちゃったら、リヴィ兄上がそれこそ精神的に参っちゃうからやめてつて!」

慌てて、父と長兄を一番年下のアイシクルが止める。

「それに、まだ、伯父上――国王陛下からも報告がないですよね!? 全容が分かってからでも遅くないですし、被害者のリヴィ兄上の意見を聞いてからにして下さい!」

正論を一番年下のアイシクルに言われ、大公家当主と次期当主は固まった。

「……すまない、私としたことが」

「私もすまない……。リヴィのことを思うと、あの不貞野郎を絞めたくなくて……」

怒りを何とか抑え込もうとしているミストラルと、不穏な言葉を言うグレイシアを内心、引いてしまったアンブラとルーチェは何とか空気になろうと気配を必死に消す。

「気持ちとは分かりますけどね、父上と兄上は一番冷静でいて下さい。じゃないと、プロミネンスの兄上と姉上が騎竜に乗って突撃して来た時に俺だけでは抑えられません」

「ん？ あいつら、来るのか？」

アイシクルの言葉に、グレイシアが眉を寄せる。

「母上が魔導具で手紙を送っちゃったみたいですよ。で、返事もあつたそうです」

「返事は何だつて？」

「ちよつと詳しく聞きたいから、明日騎竜で行くとレイン兄上からお返事が」

アイシクルの言葉に、グレイシアが溜め息を吐いた。

「……私が相手をしよう。リヴィにも伝えておかないとな……」

「アンブラとルーチェに伝えておいてもらいましょう。きっとリヴィ兄上も少し落ち着くと思いますよ」

閑話一 話が違ふ SIDEアルギロス

上手くいくはずだった。

婚約者のリヴィアスと、浮気相手のモノリス。

両方を手に入れられるはずだった。

あの場で、リヴィアスが婚約破棄に応じるとは、思いも寄らなかった。

『ですが、ウィキッド侯爵令息は信じて下さらないご様子。このまま、婚約関係が続けても、私はウィキッド侯爵令息を信頼する気持ちが持てません。ですので、謹んで婚約の破棄に致します』

予定では、この時リヴィアスは俺に泣いて縋るはずだった。

今までに見た者達の中で、一番美しい顔、効果が高い薬作りしか価値がないリヴィアスを娶るのは俺だけだ。

そう思っていた。

婚約したことで、自分の家の爵位より下になるリヴィアスは、俺より下になる。

生まれた時から準王族のリヴィアスが、侯爵夫人という扱いに落ちる。

それが俺の中では、リヴィアスより唯一、優位に立てることだった。

侯爵夫人になることを弁えているのか、リヴィアスは婚約してから、俺を立てるようになった。

パーティーでも、俺を支えるような動きを見せる。

将来的には嫁ぐのだからと、リヴィアスが作った薬を他の領地よりも安く融通してくれる。

薬師としても有名なリヴィアスを婚約者にしたことで、ウィキッド侯爵家の領民は俺に友好的な態度を取ることが増え、株が上がった。

俺にとって良い効果を齎し、『月華の君』と呼ばれる美しいリヴィアスを装飾品のように隣に立たせることがいつしか自慢になった。

婚約したての可憐な少女のような容姿だった十歳のリヴィアスは、いつも俺と話す時は美しく、小さく笑う。

リヴィアスの家族に見せるような満面の笑みではない。

小さく笑うのも可愛いのだが、満面の笑みを俺に向けてほしいと思うようになった。

しかし、リヴィアスの関心を得られないまま時間だけが過ぎた。いつしか俺は、婚約者のいない美しい令嬢に声を掛けるようになった。

浮気とも取れることをすることで、リヴィアスに嫉妬をしてほしかった。

「……アルギロス様。相手に婚約者がいらっしやらないとはいえ、浮気のように見える行動はアルギロス様にも宜しくありません。どうか、控えて頂けませんか？」

嫉妬はしてくれなかったが、リヴィアスは俺を窘めるように声を掛けてくれるようになった。

その時のリヴィアスの表情は、俺より二歳年下で背が低いこともあり、上目遣いをお願いしているように見える。

その表情が見たくて、何度も同じことを繰り返す。

それを五年半続けた時、衝撃的なことが起きた。

ブラカーシュ王国内で、原因不明の病が流行した。

流行して半年後くらいに俺も罹った。

父が流行り病に罹った俺や領民達を心配し、リヴィアスに相談した。

リヴィアスが作った特効薬のおかげで、俺も領民達も、王国内で流行り病に罹った者達は快復した。死者も出ることはなかったらしい。

俺は助けてくれた婚約者をとても愛しく感じた。

もう、浮気をしなと思うくらいに。

しかも、その功績をきっかけにリヴィアスは一代限りの公爵位を国王陛下から戴いた。

——だが、リヴィアスのその功績は嘘だった。

特効薬で流行り病が治ったとはいえ、俺の体力は落ちていた。

王都の邸宅で療養していると、プサリ男爵家の令嬢モノリスがやってきた。

リヴィアスより美しくないが、可愛い顔をした令嬢だった。

確か、平民だったが、その容姿でプサリ男爵家の養女になったと聞いたことがある。

その令嬢から衝撃的なことを告げられた。

リヴィアスの特効薬の功績は、自分のものだったと言ったのだ。

特効薬の作り方は、モノリスが書いたというメモがあり、それをリヴィアスが盗み見たのだと、

彼が書いたというメモを見せられた。

そのメモに書かれていたのは、ミミズが這ったような字で、手紙や書類で見たことがあるリヴィアスの字ではなかったのだ、初めは信用をしなかった。

だが、どんどんリヴィアスが行ったという過去の功績についてモノリスが話し始めた。その中には俺の知らないこともあり、徐々にモノリスの話を信じるようになった。

この時、俺が話に乗らなかったら、リヴィアスは婚約者のままだったかもしれない……。

そして流行り病から復帰後、俺はタイバス学園でリヴィアスと会う度に余所余所しい態度を見せるようになった。

その美しい顔で、モノリスのような弱い令嬢の功績を奪っていたのか、と俺は憤慨していた。不思議そうにしているリヴィアスを無視し、俺はいつの間にかモノリスに恋をし、溺れるようになった。

日を追う毎に、俺はリヴィアスの前で堂々とモノリスと仲睦まじい態度を見せるようになった。リヴィアスも流石に度を越していると感じたのか、何度か静かに注意をしたが、俺も聞くことはなかった。

そして、俺はモノリスにのめり込んでしまったが、リヴィアスとは婚約破棄をするつもりもなかった。

何より、男爵家の令嬢では俺の侯爵家と釣り合わない。出来るとすれば、愛人だ。

なので、正妻はリヴィアスで、愛人がモノリス、という図式が俺の頭の中では出来上がっていた。

卒業パーティーで、婚約破棄を宣言すれば、リヴィアスは泣いて縋ると俺は思っていた。

縋るリヴィアスに、愛人としてモノリスを認めさせ、功績を盗んだことを謝罪させるつもりでいた。そうすることで、リヴィアスもこれ以上モノリスの功績を奪うこともないし、俺は美しいリヴィアスと可愛いモノリスを手に入れられると思ったのだ。

が、上手くいかなかった。

国王陛下の前で宣言したことで、リヴィアスとの婚約は正式に破棄された。リヴィアスと彼の兄のレイディアンズ大公令息が家名と自分の名を懸けて潔白を宣言したことで、こちらの分が悪くなってしまった。

更に、顔色が悪いリヴィアスを思い、レイディアンズ大公令息が早々に連れて帰ってしまった。俺は弁明も、婚約破棄の撤回も出来ずに取り残された。

「それでもない大魚を逃しましたね、ウイキッド侯爵令息。父君がどんな反応をなさるか……」

「それよりも、リヴィアス様がお可哀想よ。どうして婚約者ではなく、あんな男爵令嬢の言葉を信じるのかしら。今まで、あんなにも支えていらしたのに……」

「ウイキッド侯爵令息、感謝するよ！ これで俺達も気兼ねなくリヴィアス様にお声掛けが出来る！ もしかすれば、俺の婚約者になって下さるかも……」

パーティー中も、他の貴族達からも非難するような目で見られたし、リヴィアスとの婚約を望んでいたらしい貴族達からはわざとらしく感謝の言葉を言われた。

王家の査問機関に調べられることになり、俺よりモノリスの顔が青褪めていた。

侯爵家に戻ると、父からも叱責された。レイディアンズ大公家からは抗議の手紙が届き、婚約破棄したことで薬を安く融通せず、他の領地と変わらない値段で売ることを早々に告げられたそうだ。「アルギロス！ 命の恩人でもあるリヴィアス様に何てことをしたんだ！ ミストラル殿下から抗議の手紙が来た！」

「アルギロス……もし、リヴィアス様を愛しているなら、大事にしないと何度も言ったのに……」母からは、大公家の怒りをどうにか落ち着かせ、婚約者として戻ってきて、薬を安く融通してもらうように説得するように、そしてモノリスとの婚約は認めないと言われた。弟からは軽蔑の目を向けられた。

「リヴィアス様が助けて下さった命なのに、兄上は恩を仇で返すなんて。何故男爵令嬢ではなく、婚約者のリヴィアス様のことを信じなかったの？ 僕達はある男爵令嬢の言葉を信じもしなかったのに」

そう言っただけは俺から離れていった。



それから次の日、王都の邸宅にモノリスがやって来た。

「アル様、リヴィアス様のところに行きましょう！」

モノリスが必死の形相で俺に訴え掛けた。

彼女も養父に叱られたのだろうか。

「……は？ 何故？」

「リヴィアス様に伝えるんです！ 今回の婚約破棄は、リヴィアス様のアル様に対する愛情を確認するために言ったもので、本気ではなかった、と！」

「しかし、国王陛下の前でリヴィアスと婚約破棄して、モノリスと婚約すると宣言した。もう、撤回は出来ない。それに、大公殿下や家族が会わせてくれるかどうか……」

「だから、リヴィアス様のところに行くんです！ ご家族ではなく、一人でいる時にリヴィアス様に説明して、リヴィアス様から国王陛下に撤回して頂くのです！ そうすれば、婚約破棄が撤回出来ます！ だって、リヴィアス様は国王陛下の甥なんですよ？ 甥に言われたら、伯父の国王陛下も頷くに決まっていますよ！」

首を傾げて、モノリスはにこにこ俺に告げた。

確かに、そうかもしれない。

レイディアンズ大公家の子息三人は、国王陛下の甥にあたる。

三人の中で、小柄なリヴィアスは容姿と穏やかな性格も相まって、国王陛下、王妃陛下、王太子殿下、第二王子殿下、第一王女殿下に気に入られている。

そのリヴィアスから婚約破棄の撤回を伝えたら、俺の状況も改善出来るかもしれない……。

「撤回出来たら、アル様とリヴィアス様の結婚後に私も一緒にお屋敷に住むことを伝えましょう。リヴィアス様も二度は婚約破棄が出来ず、何も反論出来ません！」

「……そうだな。よし、分かった。今からリヴィアスのところへ行こう」
「私も一緒に行きます！」
後に思えば、馬鹿なことを考えたと思う。当時の俺は追い詰められたことでモノリスの言葉に乗っ
てしまった。

二章 エリスロース竜王国へ

「少しお昼寝するつもりが、うつかり朝まで寝ちゃった……」
ベッドから起き上がり、ブランケットを見つめながらリヴィアスは溜め息を吐いた。
「申し訳ございません。何度かお声を掛けたのですが……」
金色の髪、緑色の目の侍女のアクアが、申し訳なさそうに頭を下げる。
「うん。アクアは悪くないよ。僕が気付かずに寝てしまっただけだから。気にしないで」
ベッドから降りて、リヴィアスはアクアに微笑む。
「何度も声を掛けてくれて、ありがとう」
「いえ。リヴィアス様の侍女として、当然のことです」
背筋を伸ばし、アクアは凜とした笑みを浮かべる。
「あ、そういえば、今日、僕がしないといけないことがあるとか何か聞いている？」
「リヴィアス様にして頂くことは特に聞いておりませんが、エリスロース竜王国のプロミネンス公
爵家からレイン様が来られると伺っております」
「レイン兄様？ 何か来るようなことってあったっけ？」
「その……リヴィアス様のことで詳しく聞きたい、と」

伏し目がちに苦笑を混せて、アクアは簡単に説明した。

「あー……母様が伯母様達に報告しちゃったのか……」

服を着替えながら、アクアの言葉で察したリヴィアスも苦笑する。

「ただの婚約破棄なのにね……」

「ただではございません、リヴィアス様。レイディアンス辺境領の至宝でもあられるリヴィアス様を傷付けたのです。それも謂れない罪を国王陛下や他の貴族方の前で着せ、薬で私達を守って下さる薬師としての名譽も傷付けたのです。レイディアンス大公家の皆様、私達はもちろん、従兄であられるレイン様やプロミネンス公爵家の皆様も怒るのは当然のことです」

アクアはリヴィアスが脱いだ寝衣を受け取り、鼻息荒く熱弁する。

「ありがとう、アクア。至宝って言われると何だか照れるけど……」

「至宝です。何よりリヴィアス様が齎す薬で、レイディアンス辺境領の死亡率が格段に減ったのですから。昔、魔物に襲われた私の父や兄も、リヴィアス様の薬で命を救われました」

「そう言ってもらえて、本当に嬉しいよ」

「リヴィアス様、朝食は如何致しましょう？」

「遅く起きちゃったから、ここで食べてもいいかな？」

窓から見える太陽の位置が高いことに気付き、リヴィアスは苦笑する。

「はい。すぐ準備致します」

朝食を自室で済ませたリヴィアスは、家族に挨拶し、薬草園で薬草に水やりをした後、レイディアンス大公家の領主館の大きな書庫で、よく使用される薬草から珍しい薬草まで、様々な種類が載っている図鑑を読んでいた。

「加護で作った薬を、薬草でたくさん作れたら、もつとうちの領の魔物等の傷害による死亡率も減るよね……」

図鑑に載っている珍しい薬草を見つめながら、リヴィアスは呟く。

薬神の加護は、相手の状態を見ただけでその相手に必要な薬を魔力で精製することや、希少な薬を魔力で精製することが出来る……と言われていた。

過去にも薬神の加護を持つ者がいて、その者から加護の内容を聞いた者が記したという書物により、その二つが広く知られている。

「……他にもあるけど、知られたら、僕、狙われるんじゃないかなあ……」

書庫にある光を取り込むための大きな窓を見つめながら、ぼんやりと呟く。

リヴィアスの家族を含む周囲の者には、広く知られている二つと、もう二つの薬神の加護の内容しか伝えていない。他にもあるが、伝えようにも、加護の影響なのか口を開いても、文字に書くとしても、誰にも伝えられないようになっていた。

万が一、自白等で漏れてもいけないという父ミストラルの判断で、リヴィアスの加護を知る者は全員、制約魔法を掛けている。

だから、伝えたこと以外は知らない方がいいのかもしれない。